

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十七年七月一日発行
通巻九十七号（毎月一回一日発行）

京鹿子

7月号

夏季吟旅特集

武徳祭
丸山佳子

蓮は芽に鯉は鯉づれ世が変る

政界のお口に負けぬ上り藤

武徳祭門を出てくる五つ紋

誰にでも両手をふらす花三味線





石垣に負けずぎらひの芝桜
わたくしに無い聡明さかすみ草
鯖街道つばめや犬とすれちがひ
初河鹿十七文字に収まらぬ
体内の時計くるはす夕蛙
更衣はや寝はや起き心えて



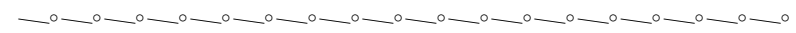
清響集
その五十一

豊田都峰

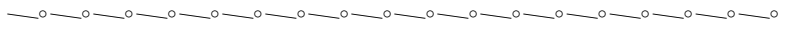
熊本天草行

麦 秋 や 特 急 切 符 は 空 の 色
再 会 や 楠 若 葉 風 あ ふ れ さ せ
緑 浴 ぶ 九 曜 の 紋 を 許 さ れ て
揚 羽 翔 つ 武 蔵 独 行 の 偈 を 誦 せ ば
燕 ま た 反 り て 櫓 を 昂 ら す
灘 う ら ら 天 草 遠 望 山 作 り





木下闇うすき十字架刻む墓
十字架墓またも老鶯ひとしきり
内湾を統べ薫風となる聖鐘
白南風や十字切る手の海たつき
信仰の磴薫風は上下より
白南風の祈りロザリオゆらしつつ
灘鎮む春落日を祈りとす
天草の天響春逝く夕日とす



白南風や崩れづくしを城址とす
城址灼け丘の畑として起伏
石垣を崩せど聖旗となびく青葉
夏潮へ原城址なほ崖立つる
雲仙灼け城址の石みな墓碑となる
原城址底よりも沸く青葉騒
母祈る限りは海の風薫る
天恋の遠まなざしをつつむ夕焼

秀華採集

亀の鳴くまで水たまりのままでもいい

坂本 敏子

亀はついに鳴かないかも知れない。そうなればいつまでも「水たまり」のまま、すなわちどのような形にもなりうる形のまま終わる。

しかし、突然変異的に亀が鳴けば、その時はどのような形にも対応出来る。そんなひとつの心理を具体的に描いているのを評価。

たんぽぽの風上流を淡くする

松本 鷹根

花冷の皿拭くやさしくなれるまで

直江 裕子

前句の純な自然風景は捨て難く、それは「淡くする」の措辞にあるし、後句の辛抱強さは必要な心構えである。あくまで俳句は具体的に、すなわち一つの形として描くことが大切である。

鈴鹿 仁

竹篋返し

水漬きたる豆腐の白さ燕の子
羅の襟の辺りのをんなへん
青萩や聞き捨てならぬ本音あり
薄暑きて猫の定位置異状あり
かたつむり角出し牛の一字もち
夏山の竹篋返しとなる恐怖
事ありて目安箱置く村薄暑

近 詠

宇都宮滴水

蝉の羽化

ほの明り夜伽の猫のものがたり
葉ざくらの影をはみ出すふくらはぎ
六月の彩を大事にサラダ皿
口先の話でをはる蝉の羽化
千枚田こだはり過ぎる雨蛙
噴水の頂みだるラブレター
五月闇抜ける分身影もたず

神麓集



たわ言はみみずにかかせ花は葉に
東風吹いて十三七つほどの花
朴も市に住所探して綿毛舞ふ
首を出す土筆浮世は喪中なり
桜散る横になりたい龍馬像

吉田 多美

佐保姫や晴耕雨読くりかへし
自由とはだらしがなくて地虫出づ
ビルマ僧日本語上手蠶れり
身のほどを知ること大事貝母咲く
室町の世を経し切月院余寒

角 直指

春の航合槌打つて海豚蹤く
西郷閑居世紀半待つ春火鉢
樟大樹やからで囲み萌芽満つ
春光の風力借りて発電耐
田植女の棚田廻しの午餉焼耐

故地・根占町 彌 寢 瓶 史

更けて読むじめつと寒き私小説
解らない新語ぞくぞく芽木ざわざわ
春灯少し昏くし人と逢ふ
神の滝凍てゆるみ初め裾みだる
野風呂先生お好きな犬ふぐりが一面に

丹生をだまき

草萌のビデオ見歩行ベルトに乗り
春曇予後の鬱気を覆ひ包む
独りでは歩けぬ視力春の泥
春陰や不調は視力にまで及び
芽木パワー浴びつつ試歩の距離延ばす

山田をがたま

花洛忌も早や七度の四月尽
円墳の芽立ちもこもこ盛り上り
乗り違へ又乗り返す花の駅
小蛙の壺に跳び入り跳び出せず
一山の僧も総出の花の寺

奥村 鷹尾

神麓集



逃げ水や名浮ばぬまゝに別れけり
船越 美喜
枕辺の春灯を消しなほ想ふ
花散るや無欲に生くを惜しまれて
必死より無心が強し草矢打つ
むらさきの靄がかゝりて芽吹山

筍の伸びすぎてゐる鯖街道
柴田 朱美
筍掘つて胚の空気を入れ替へる
死んだ筍の父が筍掘りに来る
筍の皮積みあげて四面楚歌
筍と山椒の仲を取りもてり

帰郷 大塚 まや
てのひらに囲ふ桜湯帰郷せり
鳶の輪や岸辺の桜まだ散らず
樟若葉御苑に侍る裁判所
世の中はパステルカラー五月病
一ひらも散らぬ桜や鳥零す

夕桜 荻野 千枝
ゆらゆらと幻を見し花篝
枕辺に花のこぼるる夜半の夢
春風の扉を締め忘れたやうな恋
蛤や砂紋の恋を殻に秘め
憂ひ醒め落日に染む夕桜

岩崎 憲二
明暗や法王訃報開花の報
川上は岸の新縁引き寄せる
ぶらんこは急かすあわてず刻きざむ
蛙鳴き山寮寂を直深む
馬酔木植ゑ鹿害園を守護の為

高木 智
ふらここや凭る事もなく半世紀
ふらここや空の彼方に雲が湧き
みつしりと屋根を抱き寄せ山笑ふ
聖観音待みて春の湖を観る
飛行雲交はり芦の角はじけ



京鹿子集

豊田都峰選

東京 坂本 敏子

父と子は白梅よりもはるかなり
啓蟄や空はうす目をしていたり
流し雛もとより目鼻なきものを
かげろふの中からA字ビスケット
亀の鳴くまで水たまりのままでもいい

城陽 松本 鷹根

三月を疎らに捌き葭保全
初音聞く河の蛇行を遠く見て
菜の花を束ね野に売る紙値札
ひばり野を川は流れて空になる
たんぼぼの風上流を淡くする
花木蓮とうに身ぬちになき白さ

千葉 直江 裕子

陽炎うて地中になしきことありぬ

花冷の皿拭くやさしくなれるまで
宥されて花菜明りの中にある

つむりても雪まだ青い骨拾ふ

焼夷弾降る春眠を遠く降る

落花なほ宙に浮かべる招魂碑

家系図の朧の先を辿りゆく

観音に供華の椿の華やげり

大試験歓喜の渦のなかに父

土筆の野ただ一面はおそろしく

沖おぼろ一寸法師の船が航く

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸